

碩心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可

神奈川 碩心会 発行

63年5月現在 会員数
逗子地区 169名
大船地区 278名
合計 (506名)

63年5月号 (190)
発行 者 萃
根 岸 岳
編 集 者 岳
中 村 愛 岳

沖繩行

根岸 岳 萃

去る三月八日～十日、念願の沖繩行が実現した。今大戦で唯ひとつ敵に上陸された激戦の地である。初日は海軍司令部壕、太田司令官室、幕僚が自決された手榴弾の弾痕等見学。参加部隊に吾々の仲間、佐世保工廠那覇派遣隊名を見て涙を禁じ得なかった。攻め寄せる多数の敵艦船に対し、迎撃つ我が艦艇の余りにも少ないのに驚くばかり。首里城の守礼門で記念撮影したが、附近に数多くの防空壕跡があり、戦後米軍により大分埋め戻されたとか。

二日目は東西植物園、琉球村、万座毛、海洋博記念公園と島の中央まで足をのばして観光。

そして第三日目は、我が国第二位の規模の鐘乳洞といわれる玉泉洞を見物して、平和祈念堂から摩文仁の丘へ。整然と整備された丘に、神奈川の塔をはじめ、各県の慰霊の塔が並びいちばん頂上に黎明の塔。牛島中将が座してアメリカ方向を凝視している姿とか；又その傍にある勇魂の碑は、戦後米兵が自決した中将を葬ってくれた所とか。遠望する万歳岬は追いつめられた婦女

子が、断崖から海に飛び込むとき、風圧で上体が起き、丁度万歳したようだったので万歳岬と名付けられたとか；往時が偲ばれる。急坂を下って牛島中将自決の場所、健児の塔を見学して「ひめゆりの塔」に行く。以前は花売りが多かったそうだが、今は余り見かけないが数多くの生花、千羽鶴が飾られていた。けれども訪れる人達が遺跡めぐりというよりか名所見物の気分に見えるのは残念だ。我々は乙女の像の前で「ひめゆりの塔」を合吟、往時を偲び、涙を新たにした。

私の小学校時代の同窓生は、終戦直後半数になつていた。この戦争でいちばん犠牲者が多かった同年代の私は、激戦の地沖繩戦跡めぐりを何とかしてみたかったです。摩文仁の丘からひめゆりの塔へ、又彼方此方にある一家全滅した「空き屋敷」ガイドの説明の端々にある戦争不信の言葉等々、現地を見聞して、戦争の悲惨さをあらためて痛感。今回の旅行は40名と限定があり、碩心会からは佐竹扇岳さんと二人だけでしたが「ひめゆりの塔」の合吟が、碩心会の多くの吟友と一緒にいたら尚すばらしかったと思えました。今回の旅行で私の戦後にひと区切がつけました。

◎ 行事予定

(碩心会63年度理事会)

とき・63年5月17日(火)午後7時より

ところ・逗子会館

(碩心会第12回温習会)

とき・63年6月5日(日)9時40分より

ところ・逗子図書館ホール

(第10回第二地区吟道大会)

とき・63年6月19日(日)9時30分より

ところ・鎌倉中央公民館分館

◎ 行事報告

(碩心会常任理事会)

63年4月2日(土)6時30分より六代御前社務

所に於て、左記議題につき討議

1. 62年度決算報告の件
2. 63年度予算(案)について
3. 任期満了による役員改選の件
4. 63年度理事会開催の件
5. その他

(碩心会常任理事会)

63年5月2日(月)6時30分より六代御前社務所に於て、4月2日の議題のうち、(3)任期満了による役員改選の件、時間上の都合で当日討議できなかったため、再度常任理事会をもち討議。

七段・八段位審査変更について

従来県本部で統一行われてきました、七段・八段位の審査は、今後各会毎に於て行われることになりました。(皆伝以上は従来通りです)

今年の秋期審査会(九月四日予定)には左記該当の方が受審の対象となりますので御準備下さい。

61年4月1日付奥伝認許	〃	〃	…七段受審
61年10月1日付	〃	〃	
それ以前の日付	〃	〃	

尚来年春期審査会(日時未定)には左記該当の方が受審の対象となります。

(62年4月1日付奥伝認許) …七段受審
(62年3月30日付七段認許) …八段受審

審査課題の一部変更について

右の件、64年1月1日より実施、左記に変更部分を掲載します。

- ◎ (新課題) ○ (新体詩一題のみ)
- △ (新教本による符付) × (削除)
- × 天草洋に泊すを削除
- 中伝: ◎ 青山の歌3-37に

奥伝:

×自然と人生を削除
○小諸なる古城のほとり(一)・(二)
旧4-106のみ

師範:

×小諸なる古城のほとりを削除
○千曲川旅情の歌旧4-107のみ

七段:

×奥の細道を削除
○自然と人生旧1-150のみ

八段:

×自然と人生を削除
○小諸なる古城のほとり(一)・(二)
旧4-106のみ

×母を送る路上の短歌を削除

皆伝:

◎秋日偶成3-86に
×富士の山を詠める
×小諸なる古城のほとり } を削除

九段:

◎千曲川旅情の歌旧4-107に
△偶成を新教本4-40の符付で
△やわらかにを新教本朗1-74で
×銀河を削除

○千曲川旅情の歌旧4-107のみ
△啾々吟を新教本3-112の符付で
×白鳥はを削除

十段:

◎あさみどり朗1-66に
×銀河を削除

○雨ニモ負ケズ旧4-109のみ
(正師範は略)

附記・漢詩(特に最高音)を重点的に勉強のため新体詩を一題に限定。

今様

今様とは、当世風の流行歌というほどの意で、七・五調の四句で成り、平安時代に新しくできた謡物である。和讃から起り、巫女や白拍子・遊女・傀儡などが歌っていたものが、次第に宮廷貴紳に受誦されるようになり、遂には宮中の節会や宴会などで誦されるに至った。当時、今様歌を合せて優劣を競う「今様合せ」や今様踊りもあるなど盛行を示し、伝誦の家も二条・楊梅の二流派を生ずるに至った。

今様を収めた書としては、後白河法皇が撰した「梁塵秘抄」があったが、現在伝わる部分は「秘抄」巻一の抄出本と巻二及び「口伝集」巻一の巻首抄写と巻十である。「梁塵秘抄」は当時の仏教歌謡・神歌歌謡・民俗歌謡などの歌詞を分類・集成したものである。

新体詩

明治時代に出来た新たな詩型。江戸時代が終って明治の時代に入ると、政治・経済はもとより庶民の生活の中にも、西欧の文明が急速に入ってきた。文学の世界でも例外ではなかった。初めは単にイギリス・フランス・ドイツなどの詩を翻訳して読ま

れたものが其の新鮮さに遇うと広がりは早かった。明治十五年に刊行された外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎共著の「新体詩抄」や森鷗外の「於母影」は、当時の若い詩人たちに大きな影響を与えた。井上哲次郎は序言の中で「明治の歌は、明治の歌なるべし、古歌なるべからず、日本の詩は日本の詩なるべし、漢詩なるべからず、是れ新体の詩の作る所以なり」と、これまでの短歌や俳句を中心とする日本詩の伝統とは別の新しい詩の世界について述べた。これは短歌の五・七・五・七・七、俳句の五・七・五、今様の七・五・七・五・七・五・七・五などのような定型から脱し、字音の数も、一篇の長さも全く自由な新しい詩の領域を開こうとしたものである。島崎藤村は、彼の詩集の序文の中で、「遂に、新しき詩歌の時は来りぬ、そはうつくしき曙のごとくなりき。あるものは古の予言者の如く叫び、あるものは西の詩人のごとくに呼ばはり、いつれも明光と新声と空想とに酔へるがごとくなりき。うらわかき想像は長き眠りより覚めて、民俗の言葉を飾れり。」と當時を述べている。

文体は和文・漢文・欧文とさまざまであるが、日本人になじみやすい七・五調、乃至は五・七調で綴られ、瞬く間に日本的な

詩となったのである。そして、その詩は学校の唱歌となり、校歌や寮歌となって親しまれ、更に大衆の中にとけこんで、盛行ぶりは往年の漢詩・和歌・俳句などを凌ぐものとなったのである。

古詩

漢詩の一体で古体の詩。四言・五言・七言の古体及び樂府の詩を含める総称。また唐代の近代詩に対し、それ以前に作られたもの。或は唐代以後に於てもその法則に従って作られたものを「古詩」という。句も四言・五言・七言のほかは、二言から十一言までさまざまあるが、これらは最後まで三言なり九言でとおしていないので三言詩とか九言詩とはいわない。句数に一定の制限がなく、平仄も近代詩のように毎句嚴重なきまりが設けられていない。押韻にも一韻到底（はじめから終りまで一つの韻を用いるもの）や換韻・混合韻などさまざまである。（和漢文化史小年表より）

◎和漢文化史小年表希望配布

右は過日両国国技館で行われた法人化20周年全国大会に記念品として出席者に配布されましたが、購入御希望の方は申込を。定価千二百円・5月20日迄に加藤岳相方迄。

練吟
メモ 吟の格調

○「吟道」三月号で、松井岳洋先生は「吟の道を求めて」の文章の中で、木村岳風先生からとくに吟道は格調高いもの（趣味）であることを教えられた、と述べられている。

格調とは一般には詩歌の体裁と調子をいうが、中国では漢詩で風格のととのい声調の調和した雄大な表現を重んじた流派を格調派と称したと辞典（広辞苑）にある。

○八段の審査課題である頼山陽の「母を送る路上の短歌」の第十一句、第十二句

五十の児七十の母あり

この福人間得ること応に難かるべし

旧教本は句末が「応に難かるべし」であったが、新教本は「応に難かるべし」に改訂してある。これは前にもこのメモで同様のことを指摘したことがあるが、当時の教本が「難かるべし」と濁ってルビしてあったのでそのままとなった。原句「応難」は「難」の字の下（前）に動詞がないので「応にカタかるべし」が本当。これを「難」を単読するときは澄んで読む」と称している。教本が改訂されてすでに二年有余を経過しているので早急に改めるのが本当であろう。とくに教場あるいは講堂などで「が

たかるべし」などと間違った読みで合吟していたのでは、格調ある吟詠にはほど遠い風景であるというほかない。

○この「難」の字の読み區別は、漢文読解上では説明を表すための公式であり、漢文修得上は初歩の基礎事項に過ぎない。

満室蒼蠅掃難去（海南行）

少年易老学難成（偶成）

右のように、動詞（印）が「難」の字の下に来て連続するときは「ガタシ」と濁る。ただし、中国では下に名詞が来ても動詞の場合と同様の読みが成立することに注意。

○一日難再晨（勸学）

次の訓読の送りがな「ナリ」にご注目。

一日難再晨

晨（朝）は名詞。物まね中国語で「一日朝二度来ないよ」は、中国語では適正であるが日本語としては不適。そこで、朝に動詞「ナリ」を補足して動詞扱いしたもの。○ついでに、ご存知藤田東湖の「文天祥の正気の歌に和す」（5・45）の第八句

衆芳難与儔

儔（チュウ又はたぐいと読む）は名詞。儔と動詞読み（霧を「霧す」として動詞に使う用法と同じ）して難と連続する。したがって、「儔」が一語であり「難」は「し難」と読むことはありえない。

湘南の由来見付けた

既に御存知の吟友もいられるかとも思いますが、兼々一度尋ねたいと思っていた「三夕」の歌で有名な「鴨立庵」を先日機会あって訪れました。

大磯駅近くの東海道沿いの道下にある庵は、西行当時とは思ってもよらぬ雑排水の悪臭のする小川を渡って冠木門を入ると、右手の自然石に鴨立沢と刻まれた標石が目につきます。三百年程前、小田原のウイロウ（今もある薬屋）の子孫果雪が立てたと云われ、裏手に廻ると「ああ湘南清絶地」と刻まれていました。教場でも時折、湘南の由来が話題になります。この標石が、その始めかどうかは別にして、江戸時代初期既に云われていた事だけは確認出来ました。又寒梅でお馴染の学舎同志社創設者新島襄、島崎藤村の墓碑も程近くにあり、期せずして吟にゆかりのお三方の遺跡を尋ねる事が出来ました。（行谷佳風）

（住所変更）

446 嶋津幸子(新)横浜市港南区港南台9-32-23

ヒルトップ港南台501

(電)〇四五-八三三-九一六七

(退会)

216 重田敬風(松和) 804 内田博(長柄)